

武漢作戦（1938－1939）の総括（I）

А.И. Черепанов: ЗАПИСКИ ВОЕННОГО СОВЕТНИКА в КИТАЕ
ИТОГИ УХАНЬСКОЙ ОПЕРАЦИИ (1938-1939)

滝本 可紀

一般科

The Results of the WUHAN OPERATION (1938-1939) (I)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

Cherepanov was sent as chief military adviser to the Chinese army at the height of 1938 during the Sino-Japanese war. Serious assistance in the first stage of the war came only from the Soviet Union.

In Alma Ata he boarded a plane and flew over the desert areas of Xingjiang. There was a busy highway below. Thousands of Soviet road-builders worked heroically to lay it.

He reached Lanzhou airfield and then Wuhan airfield. He was recognised by former cadets of the Whampoa School and participants in the military expedition of the Chinese revolution, 1925-1927. Chiang Kai-shek was cordial and invited him to the Military Council building. There, he met Zhou Enlai who, at the time, was the representative of the Communist Party in the Military Council. Zhou greeted him warmly. They had known each other at the Whampoa School, where Zhou Enlai had been a political instructor for some time. Thus, his work in China began.

Key Words: Military Adviser of the Soviet Union, Sino-Japanese War, Wuhan Operation

以下は国民革命軍軍事顧問 А. И. Черепанов の回想録 ЗАПИСКИ ВОЕННОГО СОВЕТНИКА в КИТАЕ "ИТОГИ УХАНЬСКОЙ ОПЕРАЦИИ (1938-1939)", 1976, НАУКА の 601 頁から 627 頁の全訳である。

再び遙かなる国へ

1938年の真夏、私は国防人民委員ボロシロフ元帥のもとに呼ばれた。キリスト教の伝説によるとペテロが天国の守門神である。当時、我々は冗談にボロシロフの副官フメルニツキを使徒ペテロと呼んだ。彼は意志強固な人で、人民委員に会いに来た人に対し、厳格にその訪問の重要性に応じて許可を与えた。今回、私は応接室で長く待つことはなかった；私が入るとすぐに、フメルニツキは机の上の書類の山から顔を上げ、人民委員の執務室のドアの方を向いて＜入ってください＞と低い声で

言くと、また書類の処理に没頭した。これがボロシロフの執務の始まりであった。彼は当時、運動を熱心に続けており、背が高くなく、がっしりした人であった。その時、彼は部屋の中央に立っていた。確かに朝の体操をやり終えたところであることがすぐにわかった。彼は私に力強く手を差し出し、背広を着てソファに座っている人を指して言った：＜駐華大使ルガニエツ オルスキーを紹介しよう＞。

私を迎えて立ち上がった恰幅のいいその人は関心をもって私をじっと見つめた。

ボロシロフはすぐに本題に入った：＜あなたが軍事顧問団長として中国軍のもとへ赴くことに同意するかどうか、あなたに訊ねることになった。現在中国に滞在しているのは同志ドゥラトウヴィンである。彼は1920年代に中国であなたと共に仕事をした人で、駐華武官と顧問団長の職責を果たしている。我々は決定した－彼はクレムリンの方を向いて意味有りそうに頷き、続けて言っ

たスペインから最近戻ってきたイワノフを駐華武官に任命する事にした。そして、あなたが同意するなら、私が既に言ったように、あなたを顧問団長に任命する。あなた自身の考えはどうですか。＜同意します＞と私は言った。

ボロシロフはルガニエツ オレルスキーの方を向いて言った：＜チェレパノフは原則を重んずる人であることを頭に入れておいてくれ。あなた方二人の間に衝突が生じないことを願っている。仲良くやってくれ。あなた方は中国人が帝国主義の侵略者と闘うのを助けるという、共通した極めて重要な仕事をやることになる。あなた方にはそれぞれ果たすべき大きな仕事がある。あなたは大使の地位にあってソ連政府を代表している。それ故、チェレパノフを含めて中国にいるソ連市民全員はあなたの管轄下にある。チェレパノフは大使としてのあなたに、軍事情勢に関して絶えず報告しなければならないが、彼自身や顧問達の仕事に関しては直接我々に対して責任を負っている＞。

ボロシロフは続けた：＜西欧列強とアメリカは侵略者に対して宥和政策を行っている。彼等は＜極東のチェコスロバキア＞のようなものを創り上げたいと願っている。一方、日本人はこれを利用して、次々と省を占領している。我が国だけがレーニンの国際主義の遺訓を少しも忘れず、いかなる人力も資力も惜しむことなく、中国人民の正義の戦いを助けている。ボロシロフは私に退室を許して言った：＜すぐに帰って出発の準備をなさい。だが、この出発についてはさしあたり、誰にも言わないように＞。

全てのことが迅速に行われた。1日か2日後に、ルガニエツ オレルスキー、駐華武官に任命されたイワノフ、そして私はアルマータに向けて汽車で出発した。

その途中、ルガニエツ オレルスキーは私達に中国の国内事情について話してくれた。

我々が中国に到着する約1年前、侵略者に対して積極的に抵抗するための全愛国勢力の統一戦線が形成された。国民党政府は長い間この統一戦線に反対し、投降路線をとっていた。だが、それは日本の植民地下の圧制に耐えることができなくなった民衆の側からの圧力を受けた。その上、抗日戦争の初期の段階では、本格的な援助はソ連からしか期待できないことがすぐにわかった。

政府がこの援助を受け取つていながら同時に、コミニストを迫害することができないのは、言うまでもなく明らかであった。国民党領袖達はやむを得ず統一戦線の形成に同意した。これは正に、中国共産党が長い間彼等に要求していたことであった。

日本の侵略が大規模に始まった時、共産党の武装勢力は国内の反動派によって殆ど消滅していた。残存部隊は中国北部の、人里離れた、荒れ果てた山岳地帯に拠点を置いた。実際、主として我が国が中国に対して行った、国際主義の政策のお陰で統一戦線が生まれ、それが当時、中国共産党を破滅から救い、自らの勢力を再建しようと

するコミニストの活動に有利な状況を創りあげた。共産党の3個師団が八路軍と名付けられ、形式上、国民党軍の編成に加えられた。

我々はアルマータで飛行機に乗り換えた。新疆の砂漠地帯の上を2千キロ以上にわたって飛ばねばならなかった。そこには主に非漢民族系の人々が住んでおり、彼等はソ連の中央アジア共和国の住民と同系統であった。だが、空路は交通量の多い幹線道路の上にあった。なぜなら、中国の民族戦争が始まった時、我が国は手持ち外貨の無い中国に2億5千万ドルの特恵借款を供与した。今のところ、借款の正式な手続きはまだ終了していなかったけれども、すでにソ連の武器が新疆省の砂漠を越えて続々と運ばれていた。

何千ものソ連の道路建設者達の英雄的な働きによって、新疆省を通る自動車道が開通していた。今まで歴史的文献の中に、この＜命の道＞の建設者達のまぎれもない功績について、どうも記載がないようだ。また、その＜利用者＞—ドライバーとサービス要員についても同様である。だが、私はたまたまある中国の詩人の詩の翻訳を読んだ。それはこの道路を通して武器を運んだソ連の友人を心から讃えた詩であった。

道路の最後の部分は中国共産党が支配している地域に比較的近いところを通っていたことに注目しなければならない。そのことによって、中国共産党が先ず大きな援助を受けた。その道路の色々な地点で、ロシアの軍事顧問が中国の将校を訓練した。

かくて、我々の飛行機の下に見える道路を何千ものトラックが毎月毎月、中国へ武器を運んだ。戦争の初期だけでも中国はソ連から、飛行機885機、大砲940門、機関銃8300丁、及びその他大量の各種装備を入手した。この装備は有効に利用する必要があった。

私は秘かに武漢へ到着したいと思っていたが、それは果たせなかった。我々のために蘭州の地方当局が催してくれた歓迎会で、私は黄埔軍校のかつての生徒や1925—1927年の中国革命期の軍事遠征の参加者に気づかれた。その中に胡宗南將軍もおり、彼はこの10年の間に軍の大物になり、蒋介石の中国西北部における腹心の將軍であった。

武漢飛行場で私を出迎えたのは中国空軍司令王將軍であった。彼は1925年の第一次東征期に第2歩兵連隊長で、それ以前は黄埔軍校の教官であった。軍事大臣何応欽は現在武漢にはいないが、戻り次第すぐにあなたを訪問すると、彼は説明した。約1時間後、蒋介石自身が私を軍事委員会の建物に招いた。

ロビーで私は周恩来に出会った。彼は当時、軍事委員会中国共産党代表であった。彼は温かく私を迎えた。私たちは黄埔軍校での知り合いで、彼は一時期、そこで政治部を指導していた。

蒋介石は私を厚くもてなし、当日開かれることになっていた軍事委員会の会議に私を招待した。私の軍事委員会会議での席はかつて私が黄埔軍校にいた時と同じよう

に、蒋介石の右、何応欽の左であった。

軍事委員会は全く有名無実の機構であった。何応欽は軍事大臣であると同時に参謀総長でもあったが、実際には、作戦にも軍事訓練（補給を除く）にさえも関与していなかった。総司令官の参謀長になっていたのは年配の將軍で、会議では一言も喋らず静かに座っていた。彼は蒋介石が自分に何か質問をするのではないかと、絶えず不安を覚えているように見受けられた。このご老体は前線で起こっていることについて何も知らなかった。報告したのは作戦部長の劉將軍で、彼は若く、精力的で、自負心が強かった。中国の標準からすると、彼は作戦面にかなり通じていた。

私が後に知ったことだが、劉將軍はドイツ軍事学派の影響を受けており、作戦計画を立てる際には Schliffen の〈カンネーの戦い〉（ハンニバルとローマとの戦い）の理論を所かまわず好んで適用したが、それには何の現実的な根拠も無かった。当然のことながら、部隊の進行を示す矢印が地図の中央のある地点に集まっているが、それは紙の上のことであって、中国軍は元の地点に留まったままであった。

蒋介石は劉の提案に同意するか、或いは若干の変更を指示しただけであった。彼はその後で、委員会のメンバーに彼等の意見を求めたが、或る者は小さい声で〈賛成〉と言ひ、或る者は黙って頷いて賛成を表した。

かくて、委員会は全くの〈飾りもの〉であった。そのメンバーは蒋介石によって指名されたが、それは軍事的功績ではなく国家への〈特別の功績〉に基づいていた。中国の有名な軍事指導者（例えば馮玉祥）或いは政界の権威ある人物は軍事委員会にほとんど招かれなかった。

中国共産党及び八路軍から蒋介石のもとへ派遣された代表の周恩来は名目的には、政治部の副部長になっていたが、実際の活動は全くできなかった。彼が軍事委員会に出席したのは、私が到着したその日一度だけのようにであった。

抗日を積極的に主唱した馮玉祥將軍は委員であったが、委員会に一度も招かれなかった。中国の政治史上著名な1936年12月の西安事件は張学良將軍の名前なしでは語れない。蒋介石は張学良の軍隊が駐屯していた西安にやって来た。それは共産党の残存武装勢力に決定的な攻撃を行わせるためであった。しかしながら、張学良は日本人によって既に占領されていた満州から撤退した軍隊を指揮しており、彼は中国の коммуニストとの連携をますます強めていた。張学良は彼等を、日本の侵略計画に抵抗する組織の信頼できる同盟者と見なした。

蒋介石はその時監禁され、自分の国内政治の立場を〈見直し〉、統一戦線の路線に同意した。しかし、彼は故奉天軍閥張作霖の息子、張学良が彼に加えた屈辱を許さず、長年にわたって張学良を事実上監禁し、大陸から台湾へ退却する際にも彼を連れ去った。

上に述べた軍事委員会の状況が中国に於ける私の日常的な仕事のやり方を、大体に於いて決定した。

私は会議の前に、私の主要な提案を口頭か書面で蒋介石に知らせた。それ程重要でない諸問題については、私は通常、それらを軍事委員会の報告書の中に入れてくれるよう劉將軍に頼んだ。それには〈顧問団長もそれに同意している〉という但し書きをつけた。

私が出席したこの軍事委員会の会議が終わった後、蒋介石は私を夕食に招いた。彼は私を自分の新しい妻の宋美齡に紹介して言った：〈この人は以前私と大いに苦楽を共にした人です〉。

かくて、私は表面上は蒋介石の好感を得たと判断することができた。この事はその後の複雑な活動に対するプラスの要因であった。

実際の活動を始める前に、私は戦線の状況や軍の状態を詳細に知り、また中国軍が日本帝国主義と闘って今まで得た経験をも研究する必要があった。

この点で、私よりも先にやって来ていたソ連の顧問達が私に与えてくれた援助の方が、蒋介石や彼の幕僚達のものよりもはるかに役に立った。中国軍には日本軍に対する抵抗を組織することのできる、高度な軍事専門家が非常に不足していた。日本軍は当時、軍事装備、軍事訓練、軍の伝統の点ではるかに進んでいた。かつて黄埔軍校で学んだ中国の將軍達でさえも、国家や軍隊が全般的に遅れているために、比較的単純な任務も処理することができなかった。ましてや、敵がしかけてきたのは大規模な作戦であった。ソ連の顧問達の援助が無かったならば、侵略者に対する抵抗の効果ははるかに小さかったにちがいない。顧問達の人選は非常に良かった言わねばならない：彼等は皆、戦闘、作戦、軍事理論に関して豊富な経験を持っていた。当時中国政府が発表したソ連政府に対するメッセージがこの事を証明している。この重要な文書の中に次のように述べられている：〈侵略に対する中国の軍事的抵抗はソ連政府が顧問を派遣してから大きな成功を収めている、と中国政府はソ連政府に知らせている。援助のためにやってきた顧問達は皆自己の職務に対して極めて熱心である〉。

確かに、私の前任者ドラットビンの指導の下に、ソ連の専門家達は大きな仕事を成し遂げた。当時、中国軍の中央機関に次のソ連の顧問がいた：作戦問題に関してチジョフとイリヤシヨフ；各兵科の先任顧問：空軍はトゥホール、砲兵はシーロフ、工兵はカリヤギン、防空はルスキフ、偵察はコンスタンチノーフと彼の助手シメレフ、戦車はペロフ、通信はブルコフ、西南戦区顧問はパニン、西北戦区顧問はバシレフ。

特に困難な任務は工兵の先任顧問カリヤギンに巡ってきた。彼の前に仕事をしたドイツ人顧問から〈遺産〉として彼が受け継いだものは、防衛施設ではなく射撃演習場に作られた実物大模型のようなものであった。

正に、こうした人々の助けで私は自分の置かれている状況を早く知ることができた。

私は直ちに実際の仕事を始める必要があった。作戦の過程を冷静に分析する時間が無く、また重要なことだが、軍隊の状況を客観的に評価する時間が全く無かった。進撃中の侵略者はそれを行うに必要な日も時間も、顧問団長の私に与えるつもりは全く無かった。中国軍司令部が私に提供した資料はそれほど信頼できなかった。

中国軍の軍事力を自分で判断しなければならなかった。20年代、革命の高揚期に私は国民革命軍に関わっていた。今や、私は国民党の将軍や将校と直接共に仕事をして、中国人民を助けねばならなかった。勿論、彼等は以前私が関わりを持った正にその軍閥であった。私は彼等と接することの困難さを身をもって体験していた。

先ず第一に明らかにしなければならなかったのは、形式的に統一された軍隊が実際にどの程度統一されているか、またそれが司令部の決定や指令をどの程度忠実に実行するかであった。軍が戦闘準備をどの程度行っているか、またその戦闘能力はいかなるものかを实地に検討するために、私は前線の色々な部隊を訪れ、戦区司令部から歩兵分隊に至るまで全てのレベルを視察した。私はまた予備部隊や軍関係の学校の訓練をも視察した。

大体次のような状況がわかった。

1937年、つまり、日中戦争が大規模化し始めるまで、中国では軍閥間の内戦は止まなかった。地方の省軍はほとんど完全に独立していた。例えば、寧夏と青海省の回教徒の将軍（馬鴻逵、馬步芳）の軍隊や四川、雲南にいた省軍。また戦線にある、いわゆる中央政府軍の中にいても、広東、広西、四川、雲南軍及び山西の閻錫山の軍隊は事実上、独立していた。この事は全て戦闘の際に大きな影響を与えた：将軍達は自分の軍隊を温存し、近くにいた友軍の支援に急がなかった。

蒋介石は先ず自分の直系の軍隊を装備し、補給を行った。従って、それは装備の点で他よりもはるかに強力であった。

中国の将軍達は、軍隊を再編成する時は常に各部隊の歴史的に築かれた特殊性を考慮しなければならない、と述べていた。

蒋介石は軍全体をより確実に自分の支配下におくために、可能な場合はかつての軍閥の部隊を分割し、それらが一カ所に集中するのを避けた。例えば、広西軍は次のように分割された：一部は広西南部の第4戦区で、他は長江北岸の第5戦区で軍事行動をとっていた。四川軍は第5、第9戦区にいた。中央政府軍は四川に通ずる長江沿岸と重慶地区に配置されていた。蘭州（甘粛省）地区には中央政府軍の3個師団があった。それにも拘わらず、抗日戦における全国民の高揚によって、軍の集中化は以前と比べて一層顕著になった。

戦時期の軍の指揮系統はどのようであったか。蒋介石元帥を長とする軍事委員会が軍の最高機関とみなされていた。軍事委員会の下に次の行営があった：李濟深将軍を長とする西南（桂林）、許将軍を長とする西北。これ

らの行営にはいくつかの戦区があったが、戦区ほど権力を持っていなかった。なぜなら、軍事委員会はしばしば蒋介石の名で、直接戦区に任務を与えた。

西南行営には第3、4、7、9戦区が入っていた。

第5戦区、即ち中央戦区と、後に雲南で編成された竜雲の指揮する第6戦区は軍事委員会に直属していた。西北行営には第1、2、8戦区が入っていた。

その下に位置するのは集団軍であった（通常、戦場の状況によって2-7個軍がそれを構成した）。

主要でない戦場には集団軍は無く、各軍は戦区司令官の管轄下にあった。

集団軍の下は2、3個師団から成る軍であった。中国軍には軍団が無かった。

抗日戦争の始まる前、中国軍（中国共産党の武装兵力約10万の紅軍を除く）は166の歩兵師団、47の独立歩兵旅団、8の騎兵師団、13の独立騎兵旅団、19の砲兵連隊から成り、総兵力は約200万であった。

その内、南京政府の軍隊は71の歩兵師団、10の独立歩兵旅団、1の騎兵師団、4の独立騎兵旅団、5の砲兵連隊を持ち、総兵力は約100万であった。蒋介石の<直系の軍隊>はせいぜい30万であった。

軍組織という点では、それは全く不統一であった：例えば、歩兵師団の兵員には7千から1万1千のばらつきがあった。4個連隊（2個旅団）から成る師団もあれば、3個連隊の師団もあった。軍隊は次第に1個師団が3個連隊の編成に移りつつあった。

歩兵師団以外に独立歩兵旅団があった。勿論、編成上の混乱は、指揮官がそのマイナスを理解していなかったことから生じたのではなく、歴史的な遺物によるものであった。そこで現状に合わせざるを得なかった。

1年半戦う中で、中国の指揮官達は作戦を立てる際、日本の歩兵1個師団が中国の歩兵4個師団の相当する、と見積もった。この計算では兵力の対比は次のようであった：

	戦時の日本軍の	中国の
	1個師団	4個師団
兵員	26354	36000
戦闘要員	7680	12000
擲弾筒	576	
軽機関銃	522	680
重機関銃	104	160
大隊砲	24	64
対戦車砲	16	16
連隊砲と師団砲	52	6-12
師団砲	12	
戦車	17	

注。 通常の中国軍一個師団：9000人（実際は常に未充足）、ライフル3000丁、軽機関銃170丁、重機関銃40丁、迫撃砲16門、対戦車砲4門）

中国の司令部は大砲の不足を軽火器で補おうとした。

1938年末、軍の部分的な再編成が行われ、4個連

隊編成の師団から3個連隊編成（4番目の連隊の基幹要員は新しい部隊や予備部隊の編成に用いられた）になり、そして3個師団の軍となった。

この措置には、（日本軍の戦闘力が縮小したことを考慮して）中国の1個軍を日本の1個師団に対抗させるという考えがあった。日本軍の方も3個連隊編成の師団への移行が認められた。もし両者の再編成が完全に実行されていたなら、戦力の対比は以下のようなものになったであろう：

	戦時の 日本師団	新編成の 日本師団	3個師団編成 中国1個軍
兵員	26354	18105	27000

砲兵の組織は次のようであった：3個或いは2個連隊編成の旅団（最高司令部予備軍）、独立連隊（2-3の砲兵大隊を持ち、砲兵大隊には2-3の砲兵中隊、砲兵中隊には2-4門の大砲があった）。山砲、対戦車砲、小口径砲は二段構えであり、（つまり、馬で牽引でき、また兵の人力によっても移動できる）それによって、機動性が高まった。これらの砲兵以外に、旧軍閥の軍隊には色々な編成の、いわゆる「直属の砲兵」があった。大部分は旧式の軽火砲であり、その砲弾の備蓄も限られていた。

迫撃砲と同様、対戦車砲及び小口径の火砲が連隊に配備され、各師団はこれらを保持していた。牽引車付きの重砲連隊がいくつかあった。

口径に応じて大砲は次のように分類された：75mmの山砲、65mmの野砲、77mmの野砲、88mmの野砲、105mmの山砲、105mmの野戦榴弾砲、150mmの榴弾砲。

独立連隊（連隊—3個大隊と探照灯部隊；大隊—3個砲兵中隊；砲兵中隊—大砲4門）から成る高射砲兵は中国軍の高射砲兵司令官の管轄下にあった。

機甲部隊の編成：

4個大隊編成の機甲連隊、1個大隊—3個中隊。大隊や若干の中隊さえも装備に差があった。装甲自動車の1個大隊は3個中隊編成。

工兵の編成：

1個歩兵師団につき3個中隊編成の工兵1個大隊；

軍の工兵大隊は3個中隊編成；

最高司令官予備軍の工兵部隊は連隊（それは3個大隊編成で大隊は3個中隊編成）。

空軍は航空委員会を通して中国軍軍事委員会の下にあった。中国全土は5つの空域に分かれていた：桂林を中心とする南西空域、西安を中心とする北西空域、成都、蘭州、昆明を中心とする中央の3つの空域。

空軍指揮官の任務は地上軍の指揮官と協力して、空軍の配備のために飛行場を準備し、地上軍との協同作戦の計画を立てることもあった。

後方支援は極めて非力であった。中国軍の連隊及び師団の輜重隊は通常、運搬人夫（輸送大隊）を使っていた。師団より上では補給は主として自動車を利用された。

最後に、中国共産党の掌握する軍事力がどんなものか説明しよう。

国民革命軍第八路軍は中国紅軍から編成され、統一戦線の協定の下に国民党軍に編成された。八路軍の兵員は45000人に決まった。しかし、それが果たすべき軍事上の任務からすると、更なる兵員の増大が必要であった。かくて、当地の住民や他の省から西北地域にやって来た人々の志願兵によって、それは最初に決められた兵員よりもはるかに増強された。

第八路軍の主力師団はそれぞれ2個旅団から成っていた。旅団を構成する連隊数及びその兵員はしばしば変動した。

八路軍が指導した遊撃戦の主要な地域は当時、河北、山西、チャハルの省境及び山西省、山東省東部であった。

葉挺將軍麾下の国民革命軍新編第四軍は南京陥落（1937年12月）後、中国共産党と国民党との交渉の結果編成された。それを構成したのは嘗ての紅軍の將兵と華中及び南東諸省の遊撃部隊であった。新四軍の作戦は主として太湖の西北及び西方で行われた。

軍事要員の訓練について若干述べねばならない。

中国軍は以下の軍事教育施設を持っていた：參謀本部軍事学院、中央陸軍学校、工兵学校、その他砲兵、通信、戦車、高射砲、騎兵、軍政、空軍、技術学校。さらに、參謀、砲術、対戦車、航空機整備要員の研修コースが設けられていた。

戦時に於ける訓練期間は専門性と訓練生の一般教育の程度に応じて、8ヶ月から1年半にわたった。1939年約4万人の訓練生が色々な学校を卒業することになっていた。この数字は軍の要求を完全に満たしていた。中等教育を受けた將校が不足していたために、司令部はやむを得ず、学歴制限を緩和し、いくつかの軍学校や研修コースに下士官を採用せざるを得なかった。そのことは客観的には、軍の民主化を促した。

中国軍の兵員補充はどのように行われたか。

中国の特徴は、全国は勿論地方的にも、兵役義務が課されなかったことにあった。軍隊は雇用制をとっており、その理由の一部は、戦争の際に軍事訓練を受けた予備軍が無かったことにあった。戦争が始まった1年半の間は予備軍があったが、それらを作戦部隊に投入しても全く効果が上がらなかった。

一般的な補充の方法は次のようであった。戦線で重大な損害を蒙った部隊は再編成された：例えば、連隊は大隊に、師団は連隊に、そのようにして戦線に留まった。余った將校や下士官達は新たに編成された部隊の基幹要員として大後方に転属された；新しい部隊は予備軍から兵員を補充し、不足分については自らも兵員を募集し、前線に赴くために（約4ヶ月あるいはそれ以上）後方で訓練した。予備軍が或る連隊に正式に編入されると、全員が補充部隊として出ていき、新たに募集された兵士を受け入れるために基幹要員を残しておくことはしなかった。毎回、予備連隊が新規に編成された。

このために、戦力の回復に時間がかかった。また、作戦中に兵員を補充するために、部隊を短期間で後方に撤退させ、それを10日―20日で再び戦場に投入することが出来なかった。更に、この制度の下では、若い未経験の兵士だけで編成された部隊が戦闘に投入された。彼等は先輩の戦闘経験をほとんど学ぶことなく、戦闘技術を戦闘行動の際に直接、最初から獲得しなければならなかった。

このことはまた、若干の師団長に、報告書で自分の部隊の損害を誇張して、できるだけ早く補充のための後退許可が得られる口実を与えた。

兵員補充制度は1938年、漢口作戦の際に我々の助けで導入された。漢口では、兵員補充のために師団によつては1年に1度、中には2度、後方に下がる者があり、その後再び戦線に復帰した。しかし、これは制度からはほど遠いものであった。

1938年の終わり、徴兵制の法律が採択された。

各省政府主席のもとに、軍管区司令部が置かれ、それが召集に関わる全ての問題を処理した。

省はいくつかの師団管区に分かれ、それぞれの長として将軍が置かれた。将軍の下に司令部が置かれ、それが召集計画を作成し、その実施を監督した。次いで、師団管区は連隊管区に分かれた(4―6管区)。その他、各師団管区に4―6の訓練中の予備連隊があった。

県長の下に徴兵部があり、それが然るべき目標数値に基づいて徴兵を実行した。総数は発表されたが、徴兵年齢が明記されていなかった。その結果、県長は要求された兵の人数を集めようとして、しばしば入隊に適さない、16歳以下の若者、50歳以上の年配者を徴兵した。もっとも政府は徴兵基準を定めてはいた：18歳から35歳までの男性を第一グループ、35歳から45歳を第二グループとした。

体格基準：身長160cm、体重55kgは第一グループ、身長155cm、体重50kgは第二グループ、身長150cm、体重48kgは第三グループ。

だが上に述べたように、基準は守られなかった。更に、全ての地区で医務委員会が機能したわけではなかった。その結果、多くの身体的に弱い若者が入隊した。法律によつて一人息子は徴兵されなかった。

定期的な住民の人口調査は行われなかった。1939年初頭に初めて人口調査が全国で一斉に行われた。

人口調査は、中国に住民登録制度だけでなく簡単な身分証明書さえも無かったので、困難であった。

召集兵の欠員を補うために、多くの省で仕事を続けながらの軍事訓練が全員対象に行われた。この目的のため、150時間のプログラムによる住民の軍事訓練を担当する部局が県長のもとに創設された。これらはすべて全く不備なものではあったが、1938年末、中国軍司令部は本気で予備部隊の設立に取りかかった。1939年7月までに550個予備連隊と70個予備大隊が作られ、兵員総数は100万に近かった。

軍需省は予備部隊の指揮官に次の金額(中国元)を与えた：一個連隊の維持に毎月20379元58分；連隊の創設費として3300元、独立大隊に1200元；兵士一人当たりの軍装費8元8分；連隊の医療サービスに300元；大隊に対して100元。

各部隊の指揮官は経費を受け取った後、地元の市場で必要な物全てを購入した。例えば、各兵士に毛布一枚と弾薬帯1本が支給された。

予備部隊に支給した装備が実際の需要とは大いにかき離れていることはしばしばあった。歩兵訓練のために一人当たり弾薬20発、軽機関銃手のために30発、重機関銃手のために50発が支給された。

兵士一人に月8元が支給された。一日2食分の食費と服装費を控除すると、実際手元に残ったのは約2元であった。予備部隊の訓練期間は3ヶ月となっていた。訓練方法には大いに改良の余地があった。

軍隊や住民の政治教育に大きな注意が払われた。3つの専門部局が同時に諸問題を担当した：軍事委員会所属の陳誠将軍を長とする政治部、国民党中央宣伝部及び非占領区を含む住民の中での宣伝と世論喚起を担当する政府機関。

中国軍政治部にはいくつかの部局があった：印刷物による宣伝、政治教育、遊撃隊内での政治指導、基幹要員育成等々。大部隊から小部隊に至るまで全てに、政治部門と政治工作員が在り、それらはその指揮官や上級の政治機関に従った。政治工作の目的は公式に表明されているように、孫文の“三民主義”を説明することであり、また兵士に侵略者に対する憎悪心を教え、民族的愛国精神を育てることであった。

政治部員は一日に数回、兵士達と懇談をした。その具体的な内容は様々であったが、一連のテーマは殆ど日本の侵略者に対する闘争の任務に関する物であった。

ここに一例を挙げよう。馮玉祥元帥が詩の形式で書いた<武装抵抗に関する十問十答>：

<誰が我々の両親や兄弟を殺しているか。

日本人だ。

誰が我々の妻や姉妹を暴行しているか。

日本人だ。

誰が我々の家や工場に放火しているか。

日本人だ。

誰が我々から金、銀、財宝を盗んでいるか。

日本人だ。

誰が我が国の東北四省、更に北平、天津、上海、武漢、南京、広州を奪ったか。

日本人だ。

然らば、日本人は我々の敵か否か。

我々の敵だ。

その恨みはどんなものか。

共に天を戴くことのできない恨みだ。

その恨みはどのくらい深い物か。

海より深いものだ。

もし我々が敵に報復しないならば、我々は人間といえるだろうか。敵に報復しないならば、人間ではないだけでなく豚や犬にも劣るだろう。

諸君は本日ただいま敵に報復する決意が有るか。

必ず敵に報復する！>

またもう一つの対話、一問一答形式のものが有り、それは愛国精神、人民に対する尊敬の念、人民との連携の強化を目指して兵士を教育するものである。

<誰が我々の両親か。

人民だ。

誰が我々の兄弟か。

人民だ。

誰が我々の隣人か。

人民だ。

誰が我々の親類か。

人民だ。

私自身はどこから来たか。

人民からだ。

我々の土地から日本人を追ひ払った後、我々はどこへ行くのか。

人民の中へ戻る。

どこから我々の食物は来るのか。

人民の税金のお陰で食物が手に入る。

人民は満腹しているか。

我々が米や粉を口にすることが出来るように、人民は質素に暮らし、極めて粗末な食物を食べている。

人民は衣服に困っていないのか。

軍に衣服を十分に供給することが出来るように、人民は継ぎを当てたものを着ている。

そうならば、我々はいかなる態度で人民に接すべきか。

人民は我々の主人である。我々は人民を愛し、尊敬すべきである。

人民に対して乱暴を働くのは良いことであろうか。

人民に対して乱暴を働く人は人間ではない。人民に対する乱暴な行為は自分の両親、兄弟、姉妹に対する乱暴な行為である。乱暴を働く者は銃殺されるべきだ。

我々は人民に如何に接すべきか。

我々は礼儀正しく、誠実に人民と接しなければならない。粗暴な言動を犯してはならない。

人民と接する際、我々は何に注意を払うべきか。

我々は人民からただ何でも取ってはならない。人民の住居に入ってはならない。また可能な限り、人民を助けねばならない>。

これらの問答は政治的に無知であるだけでなく、文字通り文盲の兵士を念頭においていた。これはまた、無知の状態に留まっている半封建的中国の農村の住民を念頭においたものでもあった。

政治将校はこの問答を兵士に読んだり解説する以外に、新聞記事、愛国的論説や演説を兵士に伝えたり、前線の状況を知らせた。

壁新聞が貼られ、アマチュア演芸が行われた。政治将

校は歌を覚え、兵士と一緒に歌い、彼等に読み書きを教え、彼等が家からの手紙を読んだり家へ手紙を書いたりするのを助けた。政治部の一般職員はいつも兵士達の中にいて、彼等と共に前線や行軍の辛酸をなめた。政治将校達には管理権も指揮権も無く、そのために色々なことが起こった。指揮官達はしばしば政治将校の威信を嫉妬し、自分自身の権限を利用して彼等の活動を妨害することもあった。

政治部は差別意識、つまり将校と兵士の断絶を無くするために、絶えず活動が続けた。例えば、古代中国の指揮官の守るべき原則が広く宣伝されたのはこの目的のためであった：

雨が降っても傘をささないこと；

夏に扇を使わないこと；

冬に毛皮のコートを着用しないこと；

指揮官は兵士に食事が分けられるまで食べないこと；

指揮官は兵士に宿営地を確保するまで宿舎に入ってはならない；

将校は兵士に自分の子供のように接し、自分の父母に對するように兵士の面倒を見なければならない。

勿論、上記の事柄に注目する一方で、日中戦争前の国民軍が反人民的性格を有していたこと、將軍達が主として地主階層やブルジョア知識階層出身であったことを考慮しなければならない。だが、民族的抵抗の課題を実現するためには、兵士や将校に愛国精神を教育しなければならなかった。勿論それは国民党政治屋達の厳しい監督の下に行われた。

私が直面したのは次のようなことであった：軍の將校団は全般的には反動的であったが、その中の勝れた者は愛国的情熱に満ち、軍が直面する任務の全人民的性格を理解していた。国民党指導者達は眉をひそめていたが、現時点では政治工作なしですますことはできないことを自覚していた。彼等は20年代国民革命軍中の左派国民党と共産党の政治將校の活動に基づく政治工作が有効であると判断した。当時は、比較的少ない兵力で数十万の軍閥軍を成功裏に撃破した。

政治部には移動宣伝隊、クラブ、移動演劇があった。宣伝隊は主として、女性を含む学生から成っていた。即席の組立式舞台で宣伝的な内容の短い芝居が上演された。青年將校達は読み、歌い、ゲームをやり、手品さえも行った。これは全て、侵略者と闘うための兵士を動員する目的を持っていた。多くのプロの俳優達が宣伝工作隊の仕事や移動公演に参加した。

政治將校は主として学生や將校達から集められた。彼等は政治指導部が創設し指導している短期コースで養成された。遊撃隊の政治將校を養成するための特別コースも創設されていた。

その外、広西省には5千人の学生軍（男女）があり、3つの連隊に分かれ、そこでも政治宣伝スタッフが養成された。口頭宣伝と同時に印刷物も大きな役割を果たしていた。軍隊内で自分の新聞、雑誌、パンフレット、大

量のポスターが作られた。これらは全て街路や村、兵営に貼られた。

敵が居住地区を爆撃する度に、殆ど全ての爆撃跡付近にスローガンが掲げられ、ピラが撒かれた。

概して、政治将校は自分達の目的を達成した：民衆は軍の愛国的任務を理解して、軍に共感し、支援を始めた。勿論、民衆は国民党の弾圧者に対して抱いた憎悪を忘れてはいなかったが、その事はしばらく横に置いておいた。今や、祖国を守ることが最大の課題であった。

遊撃隊の活動

抗日戦争で重要な役割を果たしたのは敵の後方で展開された遊撃隊の活動であった。その規模は疑いもなく、1938年秋の武漢作戦の過程にも影響を与えるものであった。

＜抗日義勇軍を組織し、遊撃戦を展開せよ。我々は決して奴隷にはならない！＞、＜華北の民衆は武装し、最後まで抗戦する＞、人有らば人を、武器有らば武器を出せ！＞このような、侵略者に対する大衆の憎悪を反映したスローガンの下に、遊撃隊が幾つも成立し始めた。

先ず、地方の自衛組織がつくられた。それらは自分の村の地域でのみ活動していたが、同時に、正規軍や遊撃隊を支援し、日本軍の所在地や動きを知らせ、村を通過する人を検査し、スパイ、土匪、逃亡兵を逮捕した。

次いで、＜抗日人民武装＞が生まれた。例えば、楊將軍の抗日義勇軍、門將軍の遊撃部隊司令部。そのような部隊は兵員7千—1万8千で、日本軍の後方に取り残された正規軍の元兵士や、占領軍の迫害から逃れてきた農民から成っていた。彼等は地方自衛組織のように一つの村に拘束されることなく、山中に組織の根拠地を持ち、より活発に広範囲に活動することができた。彼等の弱点は規律に乏しく、政治的な安定性に欠けていたことであった。彼等は時には住民から略奪し、傀儡政権の側に移ることさえあった。

遊撃隊の活動のもう一つの形は、日本軍の後方に留められた中国の正規部隊の活動であった。彼等は必要な根拠地をつくり、そこから占領軍を攻撃し、巧妙に追跡を逃れた。これらの部隊は遊撃隊活動を広範囲に展開する基礎となることができたであろう。残念ながら、大衆が自発的に立ち上がるのを恐れるという、国民党政策に固有な心配のために、遊撃隊活動は十分に展開することができなかった。

結局、重要な役割を演じたのは日本軍の後方で活動していた国民革命軍第八路軍と新四軍であった。侵略者との激戦の過程で、何千もの中国共産党員が真に英雄的役割を果たし、祖国解放を求める闘争に民衆をふるいたたせた。

重要な遊撃隊の根拠地が山西—河北—チャハルの境界地区（晋察冀辺区）にできた：賀龍指揮下の八路軍の部

隊が山西省の北西部に、約200万の住民を持つ30県を統合する根拠地をつくった；朱徳指揮下の、山西—河南境界地域（晋豫辺区）で活動していた八路軍の他の部隊は60—76県を支配していた。南京、上海、杭州地区で、葉挺指揮下の国民革命軍新四軍は同様の作戦の成功を収めた。

1938年末から1939年初めにかけて、遊撃隊活動を指導するために、李済深をチーフとする中央機関が軍事委員会に設けられた。その新しい機関は政治部と共同で遊撃隊活動の組織化に関する方策を作成するよう委託された。＜侵略者に抵抗し、全国を統一するという孫文の学説に従い、全人民を育成して防御から戦略的攻撃に転ずること＞が新しい組織に求められた。次のような政治活動を復活することが提案された（少なくとも言葉では）：非占領地域に国民党政権を維持する、村落の組織を強化する、各種団体（農、労、商、女性）の成立を助ける、指導者を強化し、民衆の生活を改善する、必勝の信念を抱かせる、傀儡政府の組織を消滅する、反逆者を肅清する、動揺分子を公表する。

軍事面では次の指令が出された：全面的遊撃蜂起を組織する、重要な防御拠点を確保する；正規軍に呼応して敵の後方を奇襲する、敵の小部隊を消滅する、補給を断つ、道路、通信、倉庫、飛行場を破壊する；常に正規軍部隊を青年によって補充し、青年の軍事教練を組織する。

経済面では：戦時向けの財政政策を実行する、日本及び傀儡政権の貨幣を受け取らない、税収を整える、統一的な税収の規定を作成する、住民の税負担を軽減し、バランスをとる；地方の貨幣を発行し、中央政府の紙幣に対する信用を保障する；貨幣の流通を促進する。

指令によって華北にチャハル—河北遊撃区、華東に山東—江蘇遊撃区が正式につくられた。それらは予想通り軍の最高司令部が管轄することになった。

山西省の北西で作戦中の遊撃隊は第2戦区司令官、山西及び河北の南部は第1戦区司令官、湖北の北部と安徽の西部は第5戦区司令官、最後に、南京、上海、杭州のデルタ地区は第3戦区司令官の指揮下にあるとされていた。遊撃区はさらに幾つかの分区に分かれ、各分区に一定の数の部隊が割り当てられていた。

1938年12月、華北を訪れた＜マンチェスターガーディアン＞の特派員の一人が次のように書いた。鉄道線路を離れると＜占領＞地域は無くなり、旅行者は＜自由＞な土地に出た。＜私は津浦線（天津—浦口）に乗って旅行した。その際、大いに苦勞し、また何度も途中停車した。旅行者は幾つかの場所では荷物を自分で運ばねばならなかった。というのは、遊撃隊によって線路が取り除かれていたので、彼等が乗っていた列車はそれ以上進むことができなかったからである。鉄道線路の橋は全て砂囊の陣地で護られていた。各駅は小さな要塞になった。だが先ず目に付くのは、駅は多くの砂囊で護られ、そこには2、3丁の機関銃とわずか10—12人の兵士しか居なかったことであった。滄州や德州のような

都市にのみ守備隊が駐屯していた。そのような都市から数キロしか離れていない村の住民は全く日本人を見かけたことがない、と私に一度成らず言った。

遊撃地区では日本軍が存在していても、生活は従来通りであった：村長や県長がいた。遊撃隊は日本軍との闘争のために農民を組織しただけではなく、日常の仕事で彼等を助けた。北京近郊に住んでいたあるアメリカの宣教師が書いている：＜遊撃隊は一年中農民達に多大な援助を与えた。それはキリスト教宣教師団が10年間行った慈善活動よりも大きなものだった＞。

遊撃隊の武装は全く近代化していなかった：刀、槍、あらゆる型の古い小銃。3人の兵士にライフル銃1丁の部隊や、2人に1丁の部隊があった。遊撃隊は自分たちの家内工業的兵器工場で火薬、手榴弾を製造し、武器を修理した。

遊撃隊活動は通常、敵陣の最も弱い地点に奇襲攻撃をかけることであった：鉄道、舗装或いは未舗装道路、倉庫、飛行場、小守備隊。遊撃隊の兵員は50-800人で様々であった。大戦はしばしば正規軍と協力して行われ、最高司令部の指示に基づいていた。

遊撃隊の戦闘期間は2-12時間で、軍の作戦と連携した大戦は3-8昼夜続いた。

中国の資料によると、1938年7月、長江下流域での日本軍に対する遊撃隊攻撃で84回のうち78回は軍用列車に対して、2回は海運、1回は河川船舶基地、1回は弾薬庫、2回は行軍縦隊に対して行われた。

敵軍の大部隊と人民武装（正規軍と遊撃隊）との戦闘の一例として、1938年チャハル-華北地区の北部で行われた遊撃隊作戦を挙げよう。

日本軍は保定、北京、天津の三角地域に大兵力を集結し、遊撃隊に向かって攻撃を開始した。これを知って、遊撃隊は北京以北の丘陵地帯へ撤退した。日本軍は遊撃隊がそこに防衛陣地を築くつもりだと考え、ただちに丘陵地帯へ向かって前進し始めた。遊撃隊の方は地形に詳しいことを利用して反転し、南に向かい始めた。そして日本軍が丘陵地帯に近付いたときには、遊撃隊の姿はなかった：彼等は日本軍が作戦を始める前にいた同じ場所にまた集結することができた。中国側の資料によると、保定、北京、天津の三角地域に約7万の遊撃隊が存在し、少なくともその三分の一は有り合わせのものを利用して武装した。

遊撃隊の戦いの規模は次の事実から分かる：中国で戦っている日本の33個師団のうち約半分は遊撃隊との戦い及び後方守備に当たっていた。日本人自身が遊撃隊の力を認めていた。

日本人の著者が次のように書いた：＜中国は古代から遊撃戦を採用してきた。“孫子”と“呉子”の本の中にそのような戦い方について多く語られている＞。

＜日本軍が国の奥深くに入れば入るほど、我々の勝利はより確実になる。たとえ中央政府の力が尽きても、共産党軍や他の部隊が遊撃戦を続けるであろう＞と中国人

は言った。

日本軍司令部が推奨した遊撃活動と戦う方法の中から次のものを挙げよう（原本からの引用）：

＜遊撃戦の指導者を根絶すること。

中央政府の行う反日宣伝は社会に深く浸透していることを心に留めること。

我が日本軍兵士はしばしば自らの行動によって皇軍の威信を汚し、我々の勝利に泥を塗り、敵に宣伝材料を与え、反日感情を強化する原因を作り出している。

テロリスト、土匪、様々な武装組織を日本側に引き入れるために、あらゆる手段を講ずること。遊撃隊内部で工作をし、彼等を崩壊に導く裏切り者を忍耐強く養成することのできる、専門の指導者をおかねばならない。

ただちに住民の武器を取り上げること。武器の値段を決めて買収すること。その際、それを隠し持っていた住民を逮捕したり罰したりしないこと。

保安隊は遊撃隊と積極的には戦わない。戦ったとしても、ただ形式的に自分の職務を果たすにすぎない。彼等、特に後方深くにいる連中は監視する必要がある。

まず、遊撃隊を一掃して交通幹線を確保し、掃討した後、沿線に小規模の守備隊を長期間配置すること。

主力は鉄道に沿ったいくつかの地点、特に山地に集結させること。

敵は我々が作戦を開始する前にすでに、そのことを知っている。

特殊な武器を使用すること。その中には催涙ガスを含む。

鉄道の重要地点に、守備隊は中国の遊撃隊に備えて強固な防衛施設をつくること。石やセメントを用いた施設が非常に有効である。

このように、日本軍の司令部は遊撃隊と戦うための細かい方策を定めた。それにも拘わらず、遊撃隊は日本軍に重大な損害を与え続けた。そのことは武漢作戦中にも見られた。